

モンテーニュの『エッセー』あるいは日常の記録

久保田 剛史

エピクテトス、モンテーニュ、サロモン・ド・テュルティの書きぶりほど、広く用いられ、深く心に染み通り、しっかりと記憶にとどまり、頻繁に引用されるものはない。というのは、それは日常のごく普通の会話に発する着想(パンセ)ばかりからできているからである¹。

1570年4月、モンテーニュは37歳でボルドー高等法院評定官の職を辞する。そして故郷であるモンテーニュ村の城館の塔にこもり、古典作品の読書にふけりつつ、日々の経験や思索を気ままに書き留めるが、この随筆的な書き物は、官職引退から10年を経た1580年の春に、『国王勲爵士団所属騎士ならびに王室警護団武士、ミシェル・ド・モンテーニュ殿のエッセー²』と題して世に送り出される。

モンテーニュはこの作品を「珍しさ *estrangement*」や「新しさ *nouvelleté*」の企てと形容しているが³、それは、多くの人文主義者たちが理想的な知のモデルを築きあげようとしたのに対して、モンテーニュの場合は、「他の人々は人間をつくるけれど、私は人間について語る⁴」という言葉にもあるように、あくまでも人間のありさまを記すことに執着したからである。じっさい『エッセー』では、モンテーニュ自身の普段の様子が書かれているだけでなく、同時代の社会に対する考察や、モンテーニュが日常生活で注目した卑近な話題なども、作品の重要なテーマになっている。

では、日常という問題は、モンテーニュの作品形成にいかなる影響を及ぼしているのだろうか。モンテーニュにとっての日常性は、『エッセー』においてどのように表現されているのだろうか。本稿では「日常の自分を書くこと」、「日常の世界を書くこと」、「日常的な言葉で書くこと」という三つの論点を軸にして、日常性というテーマから『エッセー』を読み解いてみたい⁵。

¹ パスカル、『パンセ』、中巻、岩波文庫、2015、p. 439、断章 745 (ラ 745・ブ 18) (塩川 徹也訳)。

² *Essais de Messire Michel Seigneur de Montaigne, Chevalier de l'ordre du Roy et Gentilhomme ordinaire de sa Chambre*, Bordeaux, Simon Millanges, 1580, 2 vol., in-8°.

³ Montaigne, *Essais*, édition Villey-Saulnier, PUF., 1965, p. 385 [A].

⁴ *Ibid.*, p. 804 [B].

⁵ 本稿は2015年12月5日～6日に青山学院大学にて開催された国際シンポジウム「〈日

I. 日常の自分を書くこと

まずはモンテーニュの日常性を論じるにあたって、「余暇」という概念について言及しておきたい。「学問もせず余暇を過ごすのは死である⁶」というセネカの有名な言葉にもあるように、「書物のある閑暇 *otium cum litteris*」や「勉学にいそしむ閑暇 *otium studiosum*」という生活観は、古代ローマ期の貴族や文化人だけでなく、ルネサンス期の人文主義者にとっても重要な意義をもっていた⁷。たとえば、ペトラルカは孤独の中で内省にひたる生活を称賛していたし、スペインの人文主義者アントニオ・ド・ゲバーラも、『宮廷蔑視と田舎礼賛』（1539）と題された作品で、公務に没頭する宮廷人たちに隠棲を勧めている。モンテーニュも同様に、官職を辞したのち、城館の塔（写



写真1
城館の塔（筆者撮影）

真1 参照）の最上階にある書斎に引きこもり、『エッセー』で自ら述べるように、「人生の大部分の日と一日の大部分の時間を〔塔の書斎で〕過ごす⁸」。しかも彼は、引退からまもない38歳の誕生日に、「博識なる女神たちの胸に *in doctarum virginum sinus*」こもりつつ「安息と平安 *quietus et securus*」の日々を過ごすことに決めたという主旨の銘文を、書斎の隣室に書き記している⁹。これらの行為から、古代作家に親しみ、読書を通して彼らとの対話に専念することが、モンテーニュの引退生活の最初の目的だったという点が理解できよう。

このようにモンテーニュは、余暇の悠々自適な日々のなかで『エッセー』の執筆にとりかかったのである。そして閑暇の折に筆をとったということが、あらゆる束縛や影響力をモンテーニュから取り除き、彼の発言を自由で公平

常」とは何か——西欧の場合、日本の場合」での発表原稿をもとに、加筆修正したものである。

⁶ Sénèque, *Lettres à Lucilius*, texte établi par François Préchac, Les Belles Lettres, t. III, 1965, p. 102 (Ep. 82, 3).

⁷ ルネサンス期における「余暇」については、Marie-Thérère Jones-Davies (dir.), *L'Oisiveté au temps de la Renaissance*, P.U. Paris-Sorbonne, 2002 ; Victoria Krause, *Idle Pursuits : Literature and "Oisiveté" in the French Renaissance*, Newark, University of Delaware Press, 2004 を参照。

⁸ Montaigne, *op. cit.*, p. 828 [C].

⁹ *Ibid.*, xxxiv (chronologie sommaire de la vie de Montaigne).

なものにしている。じっさい彼が『エッセー』で行う政治的な発言は、いかなる党派にも与しない¹⁰。また、人文主義者たちがそれぞれの専門領域において発言したのとは異なり、モンテーニュはつねに銜学的な態度を拒み、なんらかの体系的な思想を作り上げようとはしない。神学的議論や宗教的問題といったデリケートな話題について論じるときも、権威ある専門家の立場ではなく、世俗の人間としての発言であることを強調している¹¹。

さらには、余暇がモンテーニュに自己との関わりをもたらししたという点も、ここで指摘しておかなければならない。というのも、退職後の日常生活でモンテーニュが感じたのは、心の平静さではなく、むしろ自分自身が空虚な存在であるかのような、ある種の存在感の欠如であったからである。じっさいモンテーニュは、1570年頃に書いたとされる「無為について」の章（第1巻8章）において、「確固たる目的をもたない精神は自分を失う。なぜなら、よく言われるように、どこにでもいるということは、どこにでもいないということだから¹²」と述べつつ、自らの精神の喪失感を告白している。こうしたアイデンティティの危機のなかで、モンテーニュの意識は自己へと向かい、自らの存在を確固たるものにしようと努める。そのため彼は、『エッセー』



写真2
書斎の梁の格言（一部、筆者撮影）

という書物において、日々の生活を通して観察できる自分の姿を写し取りながら、自己を認識しようとした。『エッセー』の序文に見られる「私が描くのはこの私なのだ」、あるいは「私自身が私の本の題材なのだ」といった自己描写の宣言は¹³、こうした自己への強い渴望から生じたのである。

ちなみにモンテーニュは、読書を通して古代の作家や哲学者たちに親しみ、彼らから日々の思想を培っている。彼の書斎では、ギリシャ語やラテン語による60近くの格言が、天井を覆う梁の上にぎっしりと刻み込まれている（写

¹⁰ モンテーニュは、第3巻10章「自分の意志を節約することについて」の中で、宗教戦争における不偏不党の立場を表明している（*Ibid.*, pp. 1012-1013）。

¹¹ たとえば第1巻56章「祈りについて」の加筆箇所（*Ibid.*, p. 323 [C]）や第2巻3章「ケオス島の習慣について」の冒頭部（*Ibid.*, p. 350 [A]）を参照。

¹² *Ibid.*, p. 32 [A].

¹³ *Ibid.*, p. 3. [A].

真 2 参照)¹⁴。これらの格言の中には、聖書からの言葉や、懐疑主義者であるセクストス・エンペイリコスの言葉などが見られるが、すべて『エッセー』の中でも引用されている重要な警句ばかりである。これらの格言は、書斎の天井で響きあうかのように、いずれも人間の知的限界を説き、節度ある生き方を説くメッセージをこだまさせている。柱とは建物を支える重要な骨組みである以上、そうした建築的基盤の上に言葉を記すという行為には、きわめてシンボリックな意味が含まれている。ようするに古代作家の言葉は、モンテーニュにとって、自らの思考を日頃から支え、精神を健全で丈夫な状態に保つための重要な支柱をなしているのである。

II. 日常の世界を書くこと

これまで述べてきたように、モンテーニュが余暇生活の大部分を過ごした塔は、『エッセー』の主要なテーマである「自己の観察」や「自己の描写」を扱うのに十分ふさわしい空間であった。というのも、塔（とりわけモンテーニュの城館に見られるような円筒状のバービカン）は、そもそも自らを防御し、安寧を確保するという軍事的目的で建てられた建造物である¹⁵。しかし塔はその一方で、外部との接触がすべて遮断された閉鎖的な空間ではない。というのも塔は、ある種の距離を保ちながら外界を眺め、周囲の風景や人々の生活ぶりを見渡すことのできる特権的な場所でもあるからである。こうした塔のもつ視覚的機能は、『エッセー』のもうひとつのテーマである、日常の世界や人間に対する関心と切り離すことができない。

『エッセー』では、あらゆる日常的话题や当時のアクチュアルな出来事が取り上げられている。たとえば、死をめぐる考察、友情や教育、結婚や性愛、さまざまな国や時代の習慣、食事や衣服、睡眠といった人間一般に関する話題はもちろん、新大陸の原住民、宗教内乱、戦争の仕方、魔女狩りといった当時の社会的な話題など、モンテーニュが取り上げた話題は多岐にわたっている。このことは、モンテーニュが自己の観察者であっただけでなく、自己

¹⁴ 書斎の梁に記された格言については、Alain Legros, *Essais sur poutres. Peintures et inscriptions chez Montaigne*, Klincksieck, 2000 を参照のこと。

¹⁵ 中世の築城に見られるバービカン（前衛塔）の役割と歴史の変遷については、J・E・カウフマン『中世ヨーロッパの城塞』，マール社，2012，pp. 27-29，pp. 147-149（中島智章訳）を参照。ちなみにモンテーニュの城館は、百年戦争の時期に建てられた城塞を邸宅向きに改築したものであった（Anne-Marie Cocula et Alain Legros, *Montaigne aux champs*, Mayenne, Éditions Sud Ouest, 2011, pp. 31-32）。

を取り巻く世界にも視線を投げかけていたことを物語っている。しかも、これらの身近な話題には、モンテーニュ自身のさまざまな見解が記されており、モンテーニュの思考の柔軟さが垣間見られる。

たとえば、「匂いについて」と題された章（第1巻55章）を見てみよう。この2ページほどの短いテキストでは、体臭の話にはじまり、香水の匂いや衣服の匂い、料理で用いられる香辛料の香り、大都市に蔓延する悪臭の話などが、脱線をくり返しながらか展開してゆく。一見するとこの章は、アントワヌ・コンパニオンも指摘するように、些細な事柄を扱っているだけのように思われる¹⁶。しかし、大航海時代を皮切りに数多くの香料やその他の嗜好品（カカオ、バニラ、タバコなど）が新大陸から広まったことから分かるように、匂いは当時のヨーロッパ世界において、日常的であるとともに当時のアクチュアルな話題でもあったのだ。こうした身近な題材を取り上げながらも、モンテーニュは個人的考察を付け加えることも忘れていない。たとえば、人々を祈りや瞑想に誘うことを目的とした教会でのお香の使用について、彼は次のように述べている。「私は、医者たちが今よりもっと匂いを利用できるかもしれないと思う。というのも、匂いが私を変え、それぞれの匂いの性質に応じて私の精神に働きかけるのを、しばしば体験しているからだ¹⁷」。ここでモンテーニュは、人間の精神が匂いのような微細な要素にも左右されやすい点を指摘しており、彼の懐疑思想の根底をなす「人間の認識能力の弱さ」という主張が、きわめて日常的な例を通して証明されているのである¹⁸。

『エッセー』では、どんなに難解な主題が扱われる際にも、身近なエピソードが実例として挙げられる。たとえば「レーモン・スポンの弁護」（第2巻12章）を見てみよう。章の前半部分では、人間と動物の能力に関する比較検討がなされるが、中世スコラ哲学において何度も論じられてきたこの「存在の階梯 *scala naturae*」という神学的議論においても¹⁹、モンテーニュのアプロ

¹⁶ アントワヌ・コンパニオン『寝るまえ 5 分のモンテーニュ』、白水社、2014、pp. 148-150、（山上浩嗣・宮下志朗訳）。

¹⁷ Montaigne, *op. cit.*, p. 315 [B]。

¹⁸ 第2巻12章「レーモン・スポンの弁護」の後半部分（*Ibid.*, pp. 592-595）でも、感覚が人間の精神を欺くことを示すために、数々の日常的経験が例に挙げられている。

¹⁹ 西洋思想史に見られる「存在の階梯」の展開については、アーサー・O・ラヴジョイ『存在の大いなる連鎖』、筑摩学芸文庫、2013、（内藤健二訳）を参照のこと。ちなみにモンテーニュは、レーモン・スポンが『自然神学』で論じる「存在の階梯」に影響を受けつつも、人間の特権的性質に対して批判を投げかける（Thierry Gontier, *De l'homme à l'animal. Montaigne et Descartes ou les paradoxes de la philosophie moderne sur la nature des animaux*, Vrin, 1998, pp. 55-69）。

一チは具体的であろうとしている。彼は、人間こそが世界の中で最も優れた存在だと見なす思い上がりを非難しながら、「いったい人間は、どうやって動物たちと私たちを比較することで、動物たちが愚かだと結論づけるのか²⁰」と問いかけたあとで、「私が猫と遊んでいるとき、ひょっとしたら猫のほうが、私を相手に暇つぶしをしているのではないのか²¹」という名言を加える。ここでは、動物との関係を相対的に捉えることのできない人間の愚かさを、ペットの猫の視点から提示することにより、人間中心主義を批判している。このようにモンテーニュは、学問的な理論が人間の実生活に有効であるかどうかを知るために、つねに日常の具体的な出来事にそって考えることを好む。『エッセー』で論じられる哲学や神学といった話題が、ほとんど抽象的な議論に終始することがないのも、こうした実例のもつ日常的性質に由来している。

すでに述べたように、モンテーニュは古代の思想家たちの中でも、人間の知的限界を悟り、節度ある生き方を説く人々を好んだ。彼が思想的影響を受けたピュロン派の哲学者たちは、毎日を平穩に暮らすために、社会の規範や学芸の伝統を守ることを説いた²²。また、モンテーニュがソクラテスに敬意を表していたのも、この思想家が自らの無知を自覚し、高尚な道徳的理念を掲げることなく、つねに人間的な条件のもとで生きることを貫いたからである²³。これらの哲学者たちとは学識や境遇の点で大きく異なるものの、徳にかなった生き方を日常的に実践している人物といえ、モンテーニュによると農民たちである。『エッセー』の中では、農民たちがしばしば哲学者と同列に並べられ、彼らの謙虚で素朴な人柄や穏やかな暮らしぶりが称賛の対象になっている²⁴。モンテーニュはとりわけ「顔つきについて」の章（第3巻12章）で、自分の村がペストに侵されたときの、農民たちの平然とした態度に感嘆している。というのも、この隣人たちは、いかなる学問も知らないのに、どんな哲学者たちよりも揺るぎない精神力を発揮しながら、生まれもった自然な態度で死を受け入れるからである²⁵。このようにモンテーニュは、地に足をつけて生き、かつそこで死んでゆく農民たちの姿を称えたうえで、自然に同調して生きることを理想とする。こうした飾り気のない、安定と秩序のとれた生き方こそ、『エッセー』の最終章「経験について」（第3巻13章）で

²⁰ Montaigne, *op. cit.*, p. 452 [A].

²¹ *Ibid.*, [C].

²² *Ibid.*, p. 503 [A].

²³ *Ibid.*, pp. 1037-1039.

²⁴ *Ibid.*, p. 313 [C], p. 487 [A] et p. 660 [C].

²⁵ *Ibid.*, pp. 1048-1049 et p. 1052.

論じられる「最も美しい生き方 *les plus belles vies*²⁶」に合致するものであるが、このように、モンテーニュが求めた人間的英知には、彼が実際に観察した人々の日常的な姿も反映されているのである。

III. 日常的な言葉で書くこと

日常性というテーマは、『エッセー』の題材のみならず、作品における言語的な問題を考えるうえでも重要な意義をもっている。というのも、モンテーニュが生きた16世紀の時代は、新たな語が次々と日常生活の中に入り込んだという点で、フランス語の過渡期でもあったからである。そのため、いかなる言語で書くのか、いかなる文体や表現を用いるのか、という問いは、当時の作家にとっては重大な問題であった。大部分の学者や専門家たちはラテン語で執筆していたし、とりわけヨーロッパ各国で幅広い読者層に長く読み継がれてゆくには、ラテン語で作品を発表する必要があった。しかし、モンテーニュは『エッセー』をフランス語で執筆した。彼は当時のフランス語が移り変わりの激しい、はかない言語であることを指摘しつつも、「私はこの本をわずかの人々のために、わずかの年月のために書いている。もしもこれがあとに長く残るような内容のものであったら、もっとしっかりした言語に託すべきであつたろう²⁷」と述べている。ようするに、自己の日常生活やたわいない話題を取り上げ、そうした内容をあれこれと、移ろうまに書き連ねてゆくには、ラテン語よりもフランス語のほうが適していると考えていたのである。

また、言葉遣いという点でも、モンテーニュは、当時の民衆の日常的な話し方に忠実であろうとする。彼は専門的な語彙や大げさな文体を嫌い、「できればパリの中央市場で用いられている言葉だけを使ってすませたい²⁸」と述べているほどである。じつさいモンテーニュは、『エッセー』の加筆修正に際して、すでに古くなった語彙や意味が変わった単語、時代遅れとなったラテン語的語法などを削除する作業も行っている²⁹。ラブレーがコミカルな単語を駆使し、プレイヤード派の詩人たちが新語や職業用語を用いたのとは異なり、モンテーニュは、あくまでも普通の言葉遣いを心がけようとする。そ

²⁶ *Ibid.*, p. 1116 [B].

²⁷ *Ibid.*, p. 982 [B].

²⁸ *Ibid.*, p. 172 [A].

²⁹ Joseph Coppin, *Étude sur la grammaire et le vocabulaire de Montaigne d'après les variantes des "Essais"*, Lille, H. Morel, 1925, pp. 81-89.

の点で、彼は 16 世紀フランスにおいて、きわめて特殊な作家であったと言える³⁰。

さらにモンテーニュは、人間の日々の営みをしばしば比喩的表現として用いている。『エッセー』にみられる表現方法のうち、最も注目し値するものは、身体にまつわるイメージである。彼自身も「我々が問題にするのはいつも人間であるが、そのありさまは、驚くほど身体にかかわるものだ³¹」と述べているように、身体はモンテーニュの人間観において重要な位置を占めている。というのも我々の苦痛や快樂は、すべて感覚を通して知覚される以上、身体こそがあらゆる知識や幸福の源泉なのであり、人間の中心をなすからである。そのため『エッセー』では、身体的な活動、とくに飲食行為に関するイメージが頻繁に現われる。たとえば以下の文を見てみよう。

子供が習ったばかりのことを、教師はいろいろな面から考察させ、また同じようにいろいろな問題に適用させて、本当によく理解したか、よく自分のものにしたかを、判断しなければなりません。食物を吞み込んだときのままで吐き出すのは、よく消化されていない証拠です。消化するために与えられたものの形状が変わっていなければ、胃がその機能を果たしていないことになります³²。

引用文は理想の教育方法が語られている箇所であるが、ここでモンテーニュは知識を食べ物になぞらえたうえで、詰め込み式の教育よりも、応用力を重視した教育のほうが知識を消化吸收しやすく、生徒の知性により多くの栄養をもたらすことができると主張している。『エッセー』では、こうした（消化吸收などの）生理現象のほかにも、歩くことや手で触ること、衣服を着たり化粧したりすることなど、日常生活にみられる身体の様子が、比喩表現として映像的に用いられている³³。もうひとつの引用文も見てみよう。

話し方を真似るのは簡単ですから、そのことには誰もがすぐにもついてゆけます。しかし、判断力や構想力を真似ることは、そうすぐにはできません。たいていの読者は同じ衣服を見つけると、同じ肉体をつかんだように考えますが、

³⁰ 同時代のフランス作家との比較からみたモンテーニュの言葉遣いについては、Hugo Friedrich, *Montaigne*, traduction de Robert Rovini, Gallimard, 1968, pp. 376-378 を参照。

³¹ Montaigne, *op. cit.*, p. 930 [B].

³² *Ibid.*, p. 151 [A]. 傍点は引用者による。

³³ 身体にまつわる比喩やイメージについては、Floyd Gray, *Le style de Montaigne*, 1958, Nizet, pp. 151-181 ; Carol Clark, *The Web of Metaphor. Studies in the Imagery of Montaigne's "Essais"*, Lexington, French Forum, 1978, pp. 100-111 ; Gisèle Mathieu-Castellani, *Montaigne. L'écriture de l'essai*, PUF, pp. 156-175 を参照。

これはとんでもない間違いなのです。装飾品やマントならば借りられますが、体力や筋肉は借りることはできません³⁴。

ここでモンテーニュは表現形式と内容の違いを、衣装と肉体の違いに見立てて、内容にそぐわない文体で話を飾り立てようとする人々の滑稽さを指摘している。そして内容と文体が一致するような、飾らない自然な書き方を提唱している。引用文に見られる彼の言語観は、普段の自分の姿を再現し、「著者と実体を同じくする本 *livre consubstantiel à son auteur*³⁵」であろうとする『エッセー』の理念にも通じるものである。

いずれにせよ、ここで重要なのは、こうした映像的な表現が単なる修辭的な飾りではないという点である。『エッセー』では、人間や世界にまつわる問題が論じられる場合、つねに人々の具体的な行動をイメージしながら、その姿や情景をなぞるかたちで思索が発展してゆく。いわば日常生活のさまざまな要素は、モンテーニュの考察を推し進めるための材料であり、彼の思想の原動力にもなっている。したがって、身体的な比喻表現やイメージは、モンテーニュの思考のプロセスやそのダイナミズムを反映したものであると言える。このようにモンテーニュの表現形式は、『エッセー』が題材としている「人間の日常」というテーマにも密接に関わっているのである。

結語

本論文では、『エッセー』を「日常性」というテーマから検討してみた。モンテーニュは余暇の生活の中で、日々の自分の姿や同時代の社会に目を向け、そこから『エッセー』の題材を取り出した。そして、道徳的理念だけに依拠した実践不可能な生き方を求めるのではなく、実際の人間の生活を参照しながら、万人にふさわしい英知を紡ぎ出そうとした。また、モンテーニュの表現技法は、人間の身体という共通概念に基づいているため、あらゆる時代の読者にも理解しうる普遍的性質を帯びている。

最後に、日常性に対するモンテーニュの関心は、『エッセー』というタイトルからも解き明かすことができる。というのも、「エッセー *essai*」の語源にあたる *«exagium»* はラテン語で「秤」を意味するが、秤こそは「重さを調べる・探り出す・検討する」といった判断力の働きやその公正さを象徴するだ

³⁴ *Ibid.*, p. 172 [C].

³⁵ *Ibid.*, p. 665 [C].

けでなく、古代ローマから庶民の生活にも広まった代表的な日用品でもあるからである³⁶。以上のようにモンテーニュは、日常生活の出来事から引き出すことのできる事柄がいかに豊かであるかを、強く示唆しているのである。

³⁶ 『エッセー』における「秤」のイメージについては、Floyd Gray, *La Balance de Montaigne : exagium / essai*, Nizet, 1982 ; Olivier Millet, « Les emblèmes de la justice » in *Bulletin de la Société des Amis de Montaigne*, n° 21-22, 2001, pp. 39-52 を参照。古代ローマにおける天秤の使用については、カール＝ヴィルヘルム・ヴェーバー, 『古代ローマ生活事典』, みすず書房, 2011, pp. 432-434 (小竹澄栄訳) を参照。